

令和 6 年度

学校推薦型選抜試験問題

地域創生学部 地域創生学科
地域文化コース
小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（12 ページ）には、解答用紙（2 枚）及び下書き用紙（2 枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確認、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出して、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄（横書き）に記入しなさい。
- 5 句読点は、一字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

”

【問題1】 次の文章を読み、筆者の意見をまとめ、その意見を踏まえて、文化財を残す意義について、あなたの意見を600字以内で述べなさい。

令和元年（2019）の秋、沖縄の首里城正殿が全焼した惨事は記憶に新しい。文化財として指定されているのは建物の上屋ではなく首里城址であるが、生まれたときから首里城を見て育った若者はもちろん、再建の様子を見ていた年配の人たちでさえも涙していた。その姿を見て、あらためて、文化財はそのときを生きている人たちの思いが大切であり、新旧によってその価値を量ることはできないということに気づかされた。

（中略）

私自身が正倉院^{（注1）}宝物を守り伝える組織の一員という立場にあり、言うまでもなく唯一無二のオリジナルが何にも代えがたいという、「原物至上主義」的な観点を有しているのは確かである。しかし、たとえば東大寺の大仏も、治承四年（1180）と永祿十年（1567）に戦火で燃え落ち、天平造立時の姿をとどめるのは台座の蓮弁の一部のみとなっている。しかし、信仰という人の「思い」の拠りどころとして、対象の新旧によって価値が変わるものではない。「すべての部品を置き換えられた物体は元の物体と同じものなのか」というギリシア神話の「テセウスの船」のようなパラドックスに陥るが、歴史的な価値はオリジナルでなくとも継続しうるとも思え、正直なところ気持ちは揺れ動く。

また、金閣寺や京都御所なども、修理や再建を繰り返しており、すでにオリジナルではなくなっているものの、人々の関心は高い。建造物の場合、その歴史的な価値は存在する場所にもあるため、上屋は真正であるに越したことはないが、新たに作られたり、加えられたりしたとしても、それさえも歴史の一部として捉えることができる。一方、歴史的建造物を別の場所に移築あるいは復元して公開する、江戸東京たてもの園や博物館明治村など標本展示のようなあり方についても価値は存在する。

わが国では太古より、オリジナルではないものにも価値が認められており、伊勢神宮では遷宮のたびに社殿とともに御神宝も新たに作り替えてきた。そもそも、神道や仏教、あるいは皇室においては、形のある「もの」と形のない「こと・おこない」を守り伝え、関連する場所や空間についても重要な意味をもたせている。御神宝について、軽々に模造と同列で語ることはできないにしても、場所と関連する建物に限らず、文物、つまり「もの」の再生あるいは再現に対する価値は少なからず見出すことができる。

たとえば『風神雷神図屏風』は俵屋宗達^{びょうぶ たわらや そうたつ}のオリジナルのみならず、尾形光琳^{おがたこうりん}や酒井抱一^{さかい ほういつ}が描いた写しにも新たな価値が生まれている。また、オリジナルが失われ、複製したものが価値を持つ場合がある。いずれも中国・唐時代のものであるが、四世紀に顧愷之^{こがいし}が描いた『女史箴図』の模写本、あるいは同じく四世紀の書聖王羲之^{おうぎし}の書状集『喪乱帖』の複製の価値はきわめて高い。

これら複製品の価値は単に時間の経過がもたらしたものではなく、作品がもつ優れた魅

力が前提にあることは言うまでもない。

「模写」や「模造」「複製品」という言葉は「贋作」^{がんさく}「レプリカ」「コピー」と同義語として使われ、「にせもの」や「まがいもの」といった悪いイメージを持たれることが多い。そのため、正倉院事務所で製作している正倉院宝物の模造品については、これまで「復元模造」という語を用いることで差別化を図ってきた。おそらく同様の観点からか、九州国立博物館では「再現文化財」、東京藝術大学^{げいじゆつ}では「クローン文化財」という呼び方をしている。

呼称についての明確な規定はなく、それが作られた時代や目的によって使い分けている。一般的に文化財においては「模写」や「模造」「複製品」は広い意味で用いられ、形状のみ似せた合成樹脂製のものを「レプリカ」、材料や製作技法まで追求して作ったものを「復元模造」と呼ぶ。それぞれ、オリジナルを写し取る作業である「見取り」や「型取り」で、アナログか、デジタル技術を用いるかによって再現性の精度が異なる。ただし、必ずしも入力時の精度が出力に反映できるとは限らず、アナログ、デジタルのいずれの場合も、最終的には実作や調整には“ひと”の力量が関わる。

現在、正倉院事務所で行っている模造事業では、形だけではなく、材料・構造・技法のいずれもオリジナルと同じものを求めて取り組んでいる。ただし、経年による歪み^{ゆが}や欠失部、消えた文様を推定復元することもあるため、元の宝物とまったく同じものにはならない。そこで、もう一つ宝物を「再現 (reproduction)」するという意味から、当初の姿を再び現す「再現模造」という造語を新たに考案した。テレビ番組などで馴染みのある「再現映像」や「再現ビデオ」に似ていて通俗的な印象は否めず、「再現」を「再元」に換えて「再元模造」という語も考えてみたが、いよいよ混沌^{こんとん}とする。ここでは、一般的な場合には単に「模造」と表現し、現在の正倉院事務所の取り組みについては「再現模造」を用いることとする。

(中略)

なぜ原物があるにもかかわらず、模造品を作る必要があるのか。その理由を端的にいうと宝物の保存に資するから、ということになる。また、原物があるにもかかわらずというよりも、原物があるからこそ、材料・構造・技法を解明できて再現が可能となる。したがって、どの宝物でも再現模造が可能なのではなく、残存状況によって、想像に頼る部分が多い場合は対象として選ばれないこととなる。ただし、形状や文様が左右対称であるなど、予測可能な意匠であれば、一部が欠けたり、文様が摩滅したり、汚れで隠れたりしていても復元は可能で、製作当初の姿を甦^{よみがえ}らせるという意味で効果的な再現模造となる。選定の基準となるのは、美術工芸品としての価値が高く、精巧なものであること、あるいは地味なものであっても、歴史資料として稀少^{きしやう}価値が高いことが挙げられる。

再現模造の目的を具体的に挙げると、第一に、唯一無二の脆弱な宝物を保存継承するため、宝物に代えて展示等に用いることにある。

二つめの目的は、破損した宝物について、欠失部や湮滅^{いんめつ}（注2）した箇所を可能な限り復元し、奈良時代にはかくあったであろうという姿を再現することである。なお、一般的に模造や模写には、破損や退色した現状のままを再現する場合と、製作当初の姿を再現する場合がある。正倉院宝物の再現模造は後者に当たり、古びたように加工する古色着けは一切行わない。

破損していない、もしくはかつて修理を受けた、状態のよい宝物についても再現模造を製作する場合がある。それは再現模造の三つめの目的である危機管理の一環としての取り組みであることによる。文化財は天災や人災によって消滅する危機に常に晒されており、正倉院宝物といえども例外ではなく、危機意識をもって備える必要がある。そのためにもう一つ同じものを作り、別の場所で保管する、もしくはいつでも再現できるように詳細なデータを取っておく必要がある。ちなみに御物^{ぎよぶつ}（注3）を収蔵し、正倉院と同じく勅封^{ちくほう}（注4）で管理されている東山御文庫は、戦国時代から江戸時代の火災を経験した結果、皇室や公家の典籍写本を別置したことが成立の端緒だという。

前に記した模造の三つの目的は、再現した模造品自体、すなわち模造事業の「結果」が果たす役割について述べたものである。多くの場合において、模写や模造の一義的な目的は代替品として用いることにあるが、古くから「ものづくり」の際には形や技術を学ぶための「写し」が行われている。これは製作の「過程」に意味があるという位置づけによるもので、複製には結果と過程のそれぞれに価値があるといえる。

模造の際には、その対象となる宝物の経年劣化のため、科学的な調査に制約が生じ、究明しきれないというジレンマに陥ることがある。その場合には現代の製作者が習得した伝統的な手法や経験に依るところが多く、それによって材料や技法について検討を行う。ただし、今日の伝統工芸は、長い歴史のなかで技術の一部が失われており、正倉院宝物の作られた天平時代の技法にまで遡れない場合がある。そのため伝統工芸作家といえども、正倉院宝物に向き合った際には、解明できないこともある。現代の工芸作家にすれば、古代の工人からいしえの言葉や外国語で話しかけられているようなもので、理解しえないのである。その「通訳」は正倉院事務所の職員が担うべき“しごと”の一つと心得て、古代の文献史料を参考に材料や技法を吟味し、実技者とともに検討する。不明な点があれば、それを解明すべく実験的な試作を行うため、模造が完成するまでには相当な時間を要する。実は古代の技術を再現するうえでの重要な知見は、この模造品の製作過程を通じて得られることが多く、模造事業の意義の一つはここにある。

模造製作にあたる実技者は、創作活動を通して個性を表現する「作家」である場合が多

い。しかし、再現模造では極力創意を働かせず、ひたすら画工や塗師、石工といった「工人」に徹してもらう。宝物をよく見ると、現在の工業製品のように均質ではなく、凹凸がついていたり、左右非対称であったりする。これは精巧な出来栄えを見てわかるように、天平の工人が技術的に未熟であったのではなく、小事にとらわれない当時のおおらかな気風を反映したものである。しかし、それを真似るとなると作業は困難をきわめ、実技者は模造に着手する前に、試作を繰り返し、天平工芸の特性を手に覚えさせたいという気持ちで取り掛かる。模造に際しては、細部に固執することよりも、おおらかで力強い「天平の気分」とでもいうべき趣きを再現することを優先する。そのため、必ずしも描線は合致していなくても、筆あるいはタガネ^(注5)の勢いをそぐことなく、再現することをめざすのである。

このことは宋代の蘇軾^{そうしよく}が唱えた「写意」に近い。「写意」とは、絵を描く際に対象の形態や、表面上の色や質感を写して似せるだけの「形似」^{けいじ}、あるいは「写形」^{しゃけい}にとどまることなく、筆法を会得し、オリジナルの精神や魅力の本質を表現することである。オリジナルと寸分違わず同じものを作るのであれば、デジタルによる最新の「写形」技術を用いるほうが効率的である。しかし、再現模造では経年による歪みを補正し、湮滅した部分を推定して復元するなどの作業が必要となるため、デジタル技術のみでは実現できない。

(西川明彦『正倉院のしごと』中公新書、2023年、一部改変)

(注1) 正倉院

奈良市東大寺大仏殿西北にある宝庫をいう。聖武天皇の遺愛の品々を納めたもので、後に東大寺伝来の文書をも収め、古文書・美術品・工芸品・服飾・薬品など、奈良時代の文化財の粋を今日に伝えている。もとは東大寺に属していたが、勅封であったため、現在は宮内庁の管理下にある。

(注2) 湮滅

うずもれてなくなること。消滅。

(注3) 御物

皇室の所蔵品。

(注4) 勅封

勅命によって封印すること。

(注5) タガネ

鋼鉄製の手工具の一つ。木工ののみに似た工具で、ハンマーなどでたたいて、金属の切断、石の破碎や加工に用いる。

【問題2】 次の文章の中で、筆者は下線部「あなたの悩みの答えを探すためのヒントは古典の中にあります。」と述べているが、その理由を、文章の内容を踏まえて400字以内でまとめなさい。

悩みの原因になるのは特定の価値観です。その価値観から外れてしまった人が悩みに苦しんでいるのです。

しかし、歴史を見てきたことで、価値観には「絶対」がないことが分かりました。

価値観は環境によって規定されるものであり、時代や文化によってコロコロと変わります。ということは、あなたを苦しめている価値観も最近成立したものかもしれない、そのうち消えてなくなるものである、ということです。

価値観はもちろん大事ですが、一生振り回されるようなものではありません。

こう考えれば、いくつかの悩みから解放され、気持ちは楽になるはずです。

しかし、ここでちょっとした問題が生じます。

特定の価値観は悩みや苦しみの原因になりますが、人にモチベーションを授けてくれるものでもあります。

分かりやすい例がお金です。

お金がないことに苦しむ人は多いと思いますが、逆に、お金がモチベーションになる人も非常に多いわけです。

現代に生きる僕たちはお金に価値があると考えていますし、お金をより多く持っている人が偉いように感じているかもしれません。ほかの人より所得が少ないからと劣等感を抱いたり、逆にもっとお金を増やそうとモチベーションを高めたりしてるかもしれません。

でも、お金をたくさん持っていることが尊敬の対象になるようになったのは、近代以降のことです。資本主義の勃興とともに、ヨーロッパでは一生懸命働いて、お金を稼ぐことが“道徳的に”正しいことだと思われるようになりました。

たとえば、中世のヨーロッパはキリスト教が支配していましたから、稼ぐ力よりも信仰心のほうがずっと重要でした。

歴史的に見れば、モノからサービスまで「お金で買えるもの」がこんなにそろっている現代社会のほうが特殊なんです。仮に江戸時代の農村に超お金持ちがいたとしても、そもそも、お金で買えるものが非常に少なかったわけですから、どうしたって金銭の価値は今よりも低かったに違いありません。

僕たち個人も、現代社会も、「お金」の価値を強く信じている。

だからこそ、お金が原因の悩みや争いがたくさん生じますし、逆にお金によってモチベーションを得る人や組織もたくさんあります。

特定の価値観や概念は人に苦しみをもたらすことがある一方で、力を与えてくれる場合もあります。価値観に「絶対」がないことを知れたのはよかったけれど、それでは生きていく上でのモチベーションを失ってしまわないだろうか……。

そう考える人がいても、おかしくありません。さて、困りました。

困ったとき、悩みに直面したときはどうすればいいのでしょうか？

僕のオススメは「古典を学ぶ」です。

僕の言う「古典」とは、時代を超えても価値を失わない、人類の^{えいち}叡知が詰まった書籍のことです。

あなたの悩みの答えを探すためのヒントは古典の中にあります。

僕はもともと、昔の人をバカにしていました。

だって、昔の人は現代レベルの社会科学も自然科学も知らないし、PC もインターネットもないから、接することのできる情報もすごく限られていたわけです。そんな無知な人たちから学べることなんてないだろうと、20 歳くらいまでの僕は思っていました。

ところが、古典を読み始めてびっくりしたんです。

僕たちが考えるようなこと、直面するような悩みは、昔の人たちがあらかた考え尽くしている。昔にもずば抜けて頭が良い人はいて、彼らは自分の考えを本に残しているんです。

大学で卒業論文を書いた経験がある人なら、論文を書く前に「先行研究」をちゃんと調べましょう、と習ったはずです。

あなたが考えるようなことは、過去の人ですでに考えて、研究結果を残しています。だから、いきなり調べ物をしたり実験をしたりするのではなく、過去の研究を検索して、同じような問題を追究した人がいないか探しましょう、というわけです。そうしないと二度手間になってしまいます。

日常的な悩みについても同じことがいえます。

ぶっちゃけ、あなたが考えるようなことは、ほかの人もすでに思いついているんです。

今まで存在した人間の総数は 1000 億人を超えるという説がありますが、あなたの脳に浮かんだ考えが、ほかの 999 億 9999 万 9999 人の脳に浮かばなかったわけではありません。

もちろん、本を書けたり、後世に残すものを作れたりした人はごく一握りでしょう。しかし、彼らがすさまじく頭が良かったことを見落としてはいけません。PC なんかなくたって、「脳」という超高性能のコンピュータがありますから、やれることはとても多かった。

いい例が、古代ギリシャのアリストテレス（前 384 年—前 322 年）です。

彼は哲学者ともいわれますが、哲学に限らず、物理学も政治学も生物学も心理学も医学も文学もやっています。そして多くの分野で重要な業績を残しました。アリストテレスの影響が 2000 年以上続いた分野も少なくありません。

現在では、彼の書いたものの中には多くの間違いがあることも分かっています。しかしだからといって彼の著作のすべてに意味がないというわけではありません。

それよりも大切なのは、アリストテレスは 2000 年以上も前に、そのまま現代に通じるようなたくさんの問題を発見していた、ということです。

「問題」を「悩み」と読み替えるなら、あらかたの悩みは古代の人々が見つけてしまっている、と言っても過言ではありません。

歴史上にはたくさんの頭の切れる人や優れた人格の人がいて、あなたが今、直面しているような問題にはすでに答えを出していたり、少なくとも重大なヒントを残していたりするんです。

だから、僕たちは古典を読むといい。

古典を読めば、過去の天才たちの頭を借りて、自分の課題や悩みに向き合うことができるからです。

そうは言っても、古典に答えが書いてあるわけじゃないでしょ？

それに、アリストテレスや孔子と自分じゃ、生きている環境が違いすぎるじゃん！

そんな声も聞こえてきそうですね。

たしかに、その反論はもっともで、古典にドンピシャの答えが書いてあるケースはあまりありません（たまにあるのがスゴイのですが）。過去の偉人が生きた時代と現代とでは、社会が全然違うのも事実です。

しかし、だからといって古典に意味がないことにはなりません。むしろ逆なんです。

先ほど、「先行研究」を調べるべきだという例を出しましたが、先行研究を調べるのは「答え」を探すためではありません。卒論に「先行研究に答えが書いてありました」と書いて提出したら留年するに決まっています。あなた自身の問題を研究しないと意味がないからです。

悩みも同じで、あなたが歴史上に一人しか存在しない以上、自分の悩みには、自力で向かい合わなければいけません。

ただ、自力で悩みに向き合うにしても、準備なしでいきなりゼロから悩むのは非合理的だ、と言いたいんです。似た問題に直面した先人たちの先行研究をもとに、自分の問題意

識をブラッシュアップしたほうがいいのではないのでしょうか。

先行研究といわれても分かりにくいかもしれないので、具体的な例を出してみますね。

僕はいろいろなベンチャーで企業の理念づくりに関わった経験があります。このとき、いつも感じていたのは、「古典を読んだほうがいいなあ」ということでした。

企業理念は、会社のメンバーが普段思っていることや大切にしていることなどからつくりまします。ただ、どんなに頭が良い人でも、「自分は何を考えているのか」「自分はどんな人間なのか」を、自分の頭だけで考えるのは難しい。自分を客観視しなければいけないからです。

でも、比較物があれば、自分自身を見つめやすくなります。

たとえば、いきなり「あなたは読書が好きですか？」と聞かれても、よほど読書好きな人以外は戸惑うと思うんです。比較する対象がないですから。

そこに、ものすごく本が好きで年に100冊以上読んでいるような人がいたら、その人と比較した上で「まあまあ好き」とか、自分自身を正確に観察できますよね。

これは単純化した例ですが、古典が優れているのは比較対象を提供してくれるからです。

自分の頭だけで考えたり悩んだりするのは難しいけれど、比べるものがあれば簡単になります。だから、古典を読むんです。

念のため補足しますが、別に古典を書いた偉人たちの考えに従う必要はありません。

先ほどはアリストテレスの考えを紹介しましたが、僕だって彼の考えに100%賛同すべきだとは思っていません。場合によっては、過去の偉人を反面教師にすることもあるでしょう。

ですが、そうであるにしても、比較物があると考えることが楽になるんです。その比較物が過去のすごく頭が良い人が残したものなら、自分の考えもブラッシュアップされていきます。

それが、古典のいいところです。

それだけではありません。

古典を読むと、悩みの解決策が見つかるだけでなく、悩みそのものが消えてなくなっていくこともあるんです。

悩みというものが特定の価値観から生まれるものだということは、これまで繰り返し伝えてきました。だから古典を読んで特定の価値観から解放されれば、目の前の悩みは消えていきます。少なくとも、そこまで深刻に悩む価値がないことが分かります。

先ほど出したお金の例でいくと、収入が他人と比べて少ないことに悩んでいる人がいるとして、古典を読んで「お金」という価値が絶対ではないことを知れば、悩んでいる自分

を客観的に見つめ直すことができます。

ほかにも、世間の価値観を絶対だと思い込んでしまうことで、そもそも悩む必要はないのに、「自分は悩んでいる」と信じ込んでいるパターンも多いんです。本心では悩んでいないのに、悩んでいると思い込んでいるという、ややこしいケースです。

実は、昔の僕がそうでした。

学生のころは、なんとなく「お金を稼がなければいけない」と思い込んでいた僕ですが、大企業やベンチャーをいくつか経て気づいたのは、「あれ、僕ってお金に興味がないな」ということでした。

もちろん自分や家族が食っていくだけのお金はありますし、会社を経営するとなると、事業を回す資金も必要です。ただ、僕個人に大金持ちになりたいという気持ちはあまりありません。

でも、学生時代の僕は自分でもそのことに気づいていなかった。なぜなら、「所得を増やしていくのは良いこと」という価値観しか知らなかったからです。

悩みそのものが消えたり、そもそも悩んでなんかいなかったことに気づくことができる。これも、古典のすごい効果です。

僕は、もう何回「そもそも」という言葉を使ったか分からないくらいですが、古典には、問題を根本からひっくり返してくれる力があるんです。

そして、現代は古典を読むには最高の時代です。だって、歴史上でもっとも古典の数が多いのが現代なんですから。

人類には優秀な人がたくさんいて、自らの考えを本に残しています。現代を生きる僕たちはそれを読めるんです。

これって、すごいことだと思いませんか？

多くの人は悩みに直面したら、友達に相談したり、自己啓発書を読んだりすると思います。でも僕はやはり、過去の人を書いた古典を読むことを勧めたい。たいがいの悩みに対するヒントは、古典の中にありますから。

(深井龍之介『世界史を俯瞰して、思い込みから自分を解放する歴史思考』

ダイヤモンド社、2022年、一部改変)